

『ボウリング発祥の地の謎』を自費出版——高田誠氏に聞く

日本ボウリング発祥の新事実を発掘



▲高田誠さん。㈱プロフェッショナルボウリングアカデミー代表として、現在もボウラーの相談に乗る一方、日本オリンピック委員会の情報・戦略強化スタッフなどの肩書も持つ

日本のボウリング場第1号は、1861年(文久元年)6月22日、長崎に開業した『インターナショナルボウリングサロン』というのが、長く語られてきた定説だった。しかしそれに疑問を感じた高田誠さんが、10年に及ぶ調査・研究の結果、それを覆すいくつかの新事実を発見、1冊の本『ボウリング発祥の地の謎』(非売品)にまとめた。仕事場におじゃまして、その発見までの経緯をうかがった。

日付の英字紙『ナガサキ SHIPPING LIST AND ADVERTISER』に“インターナショナルボウリングサルーンが6月22日に、ヒロババストリート

にオープンした”という、開業あいさつの広告が掲載されているのが発見された。日本ボウリング場協会は、1972年(昭和47年)に、その6月22日を“ボウリングの日”と制定し、今日に至っている。さらに1974年には、新たな資料の発掘や証言を加えて、NHK総合テレビで『文久元年のボウリング』として放映され、広く認知されることになる。

「番組内で、日本ボウリング発祥の地として1枚の写真が紹介され、その写真が今日まで、多くの出版物などで引用されてきました。ただ一見してそれは、広告に記載されている住所のヒロババストリートではないとわかったし、地元の人に見せても、これは

大浦だよって言われる。ヒロババと大浦は3~4キロ離れているんです」

調査をしていくうちに、長崎大学附属図書館の写真資料の中にその写真を発見。1870年(明治3年)に上野彦馬氏が大浦11番地の下がり松橋を撮影したものらしく、後ろに写っているのは、ドイツのテキストル商会の建物(右はリンガー商会)ということまで判明した。

「それではインターナショナルボウリングサルーンは、一体どこにあったのかということですが、現在の籠町の一角だろうということまでしか突き止めることができませんでした」

発祥の地に対するこれまでの定説に疑念を抱き、調査を進めていくうちに、さらに新しい事実を発見する。



▲現在の規格に近いレーンが設置されたゲルマニアボウリングサルーン(後の長崎ボウリング倶楽部/アメリカ国立公文書館所蔵)

「これは私の大発見で、自慢をしてもいいと思うけど(笑)、インターナショナルボウリングサルーン開業の広告のすぐ上に、コマーシャルホテルの広告が掲載されていて、よく読むと、2レーン設置されていると書いてある。だからこちらの方が、インターナショナルボウリングサルーンよりも古いと考えるのが妥当だと思います」

私が思う真の発祥の地

コマーシャルホテルもそうだが、ホテルとはいうものの、この当時は宿泊できるような施設ではなく、外人専用のバーの名称として使われていたようだ。

「しかも日本家屋を間借りしていたもので、現在のような長さのレーンを設置できるような奥行きはなかった。したがって、ヨーロッパからきたスキットルズといわれる、20フィート(約6メートル)前後の小型のレーンで、お酒を飲みながら賭博を楽しむような施設だったのではないかと想像されます。だから



▲約10年間の調査・研究の成果『ボウリング発祥の地の謎』を手にする高田さん。非売品だが、国会図書館や長崎県立図書館などに収蔵されている

それをボウリング場といっているものかどうか…」

現在のボウリングレーンの規格に近いものが設置されたと推測できるのは、1873年(明治6年)のゲルマニアボウリングサルーン(後の長崎ボウリング倶楽部)の誕生まで待たなければならぬ。

「ゲルマニアボウリングサルーンも、何フィートだったかはどこにも書いていない。ところが工事を請け負った大工が、賃金の未払いで訴えた訴訟記録が残っていた。その訴状の中に長さ90尺、幅4尺ぐらいの…、ということが書いてある。90尺(約27メートル)っていうのは長すぎるけど、アプローチやピンデッキまで入れて、大雑把に書いたのではないかと思います。いずれにしてもバーに設置されていたような小型のものではなく、現在のボウリングにつながるような本格的なものだったことは想像できる。そういう意味で、個人的にはこちらの方が“日本ボウリング発祥の地”ではないかと思っています」

そうした調査・研究の成果を、最初の渡来がなぜ長崎だったのかという時代考証も含め、1冊にまとめたのが『ボウリング発祥の地の謎』だが、市販されていないのがなんと残念だ。

「歴史というものは、どこかでだれかが一度間違ってしまうと、その間違いがどんどん拡散してしまい、実際とかげ離れた歴史になってしまう。間違うにはそれなりの理由があったと思うので、それを責めるつもりはありません。ただ修正すべきところは修正し、後世に正しい歴史を残したいと願っています」

日本人ドリラーの先駆者

本題に入る前に、まずはご自身のこれまでの歩みを振り返っていただいた。生まれは1935年(昭和10年)5月24日、現在85歳だ。少年時代は野球に打ち込み、高校卒業後は、一浪の末に早稲田大学に合格、野球部に入部する。

「佐世保北高でそこそこ打っていたから、早稲田でも通用すると思ったけど、井の中の蛙で、自分より下手なのはほとんどいなかった(笑)。レギュラーにはほど遠かったですよ」

ボウリングとの出会いは1年生のとき。早慶戦の入場切符のもぎりをした帰りに、神宮球場のそばにあった東京ボウリングセンター(1952年開場)に、仲間と面白そうなのがあるからやってみようと思ったのが最初だった。

「ゲーム料金が120円、入会金が3万円でした。当時の東京ボウリングセンターは、社員の多くが早稲田の応援団出身だったので、ゲーム代だけでやらせてもらえた。といってもラーメン1杯が25円程度の時代に1ゲーム120円ですから、気軽にできる遊びではなかった」

熱中するようになるのは社会人になってからだったが、運動をずっとやってきただけに、上達は早かった。東京都代表として全日本選手権のチーム戦で優勝の記録もある。ただボウラーとしてよりも、日本におけるドリラーの草分けとしての存在の方が有名だろう。

「東京ボウリングセンターと一緒に投げていたなかに、現在のABSの渡邊保会長がいて、コロンビアというボールを輸入して売って一緒にやろうといわれた。ボールを売るとなると、



▲インターナショナルボウリングサルーンの開業挨拶の広告が掲載された英字新聞。すぐ上にはコマーシャルホテルの広告が掲載されている



▲インターナショナルボウリングサルーン(中央のバルコニー付きの建物)を撮影したものと伝えられてきたが、間違いであることを確認(長崎大学附属図書館所蔵)

穴の開け方を覚えなきゃ…というのが、ドリルの世界に足を踏み入れるきっかけでした。アメリカに行って、アルバイトをしながら勉強もしました。好きなことをやっているの、苦労でも何でもなかったですよ」

㈱日本フランスウィック社と契約し、40年にわたり全国をキャラバンで回った。また国内のみならずアジア各国にも出向いて、ドリラーやインストラクターの育成にも力を注いだ。その高田さんが、なぜボウリングの発祥に関心を持ったのか…。

「長崎は私が生まれ育った故郷。そこを舞台にした話がいいかげんでは困るという、大げさにいえば怒りが、私を調査に駆り立てたんです(笑)」

発祥の地の写真に疑念

1861年(文久元年) 7月10